

令和6年産

気仙沼・南三陸 稲作情報 総括号

令和7年1月8日発行

宮城県米づくり推進気仙沼地方本部・宮城県気仙沼農業改良普及センター

TEL 0226-25-8069 FAX 0226-22-1606

1 気象経過

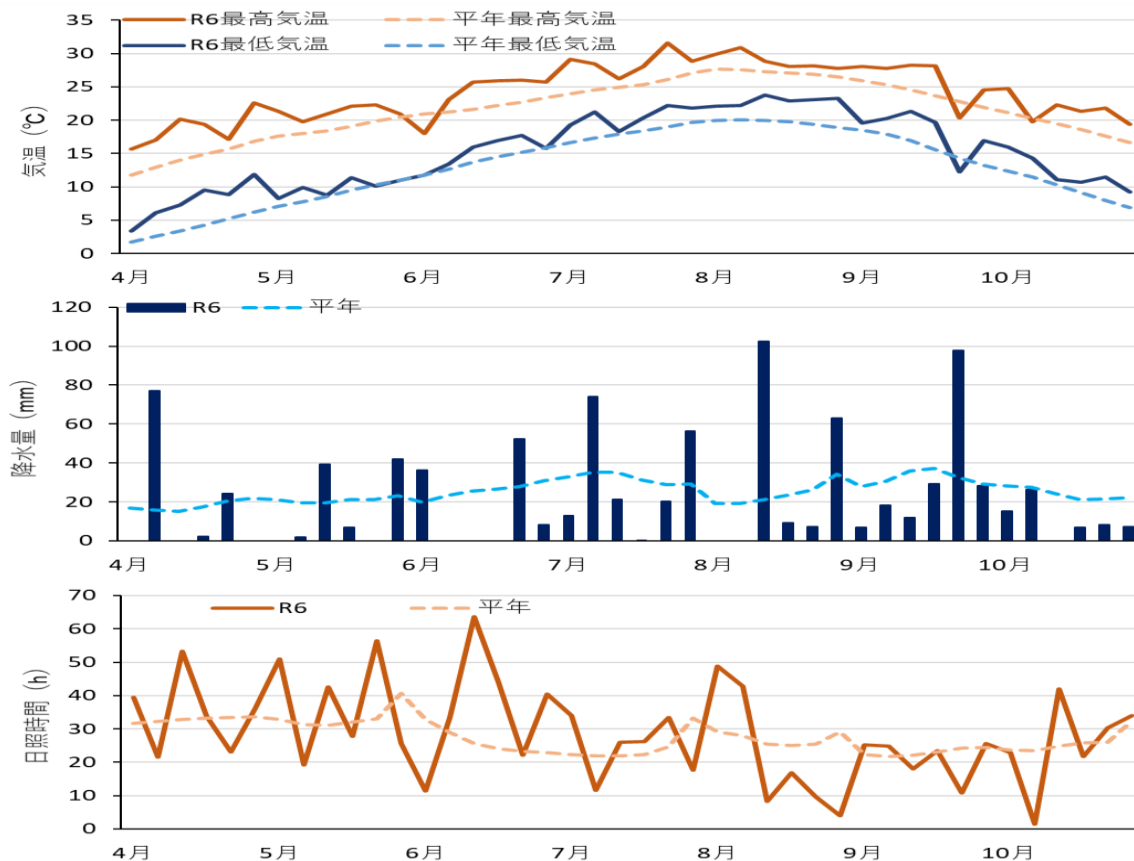


図1 令和6年稲作期間の気象経過図（気仙沼アメダス）

【気象の概況】

- ・ **気温**
6月上旬に低温となりましたが、以降は概ね平年を上回る気温で経過しました。梅雨入りは6月23日となり平年より11日遅く、梅雨明けは8月1日で平年より8日遅くなりました。
- ・ **降水量**
4月下旬から5月上旬にかけて降雨が少なく、また、梅雨入りが平年より遅かったことから6月も降雨の少ない日が続きました。9月には断続的に降雨がありました。
- ・ **日照時間**
6月上旬と7月下旬は低気圧等の影響で、また8月中旬から下旬は台風や前線の影響で曇りや雨や日が多く、日照時間は少なくなりました。

2 管内の生育経過

(1) 播種

- ・ 管内の播種盛期は平年と同じ4月14日でした。
- ・ 育苗期は高温傾向で経過したため、高温障害による苗の障害が散見されましたが、苗の生育は概ね順調でした。

(2) 田植え

- ・ 管内の田植盛期は平年より2日遅い5月18日でした。
- ・ 6月上旬は低温傾向となったため、5月下旬に田植えを行ったほ場では活着の遅れが見られました。

(3) 出穂

- ・田植え以降、概ね高温で推移したため生育は順調で、出穂盛期は平年より3日早い8月1日でした。

(4) 刈取

- ・登熟期間も高温で推移したことから、刈取盛期は平年より3日早い9月28日でした。
- ・刈取期間の断続的な降雨と倒伏の拡大により、一部では刈り遅れが見られました。

表1 管内における各作業の状況

年	播種			田植え			出穂			刈取		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期	盛期	穂揃期	始期	盛期	終期
R6	4/7	4/14	4/22	5/9	5/18	5/25	7/28	8/1	8/7	9/16	9/28	10/13
前年差	3日遅	2日遅	同じ	同じ	1日遅	2日早	同じ	同じ	2日早	3日遅	2日遅	5日遅
平年差	3日遅	同じ	同じ	1日早	2日遅	同じ	4日早	3日早	3日早	2日早	3日早	2日早

※「始期」、「盛期」、「終期（穂揃期）」は、それぞれ水稻作付け面積の5%、50%、95%で作業が終了した日。

※「平年差」は、令和元年から令和5年までの5か年平均との差。

3 水稻生育調査ほの生育調査結果

(1) 生育状況

- ・苗の活着は概ね天候に恵まれて順調でした。以降も気温が高めに経過したことから生育は順調に進み、出穂期は8月2日、成熟期は9月9日になりました。
- ・草丈及び茎数は、概ね生育の目安どおりの生育となりましたが、葉色は、幼穂形成期及び減数分裂期に追肥（N1kg/10a）を実施したものの、目安を下回りました。

表2 生育調査ほにおける生育ステージ

地点	年	品種	田植日	幼穂形成 始期	減数 分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R6	ひとめぼれ	5/20	7/10	7/18	8/2	9/9

※今年度は生育調査ほ場を変更したため、平年値及び前年値はありません。

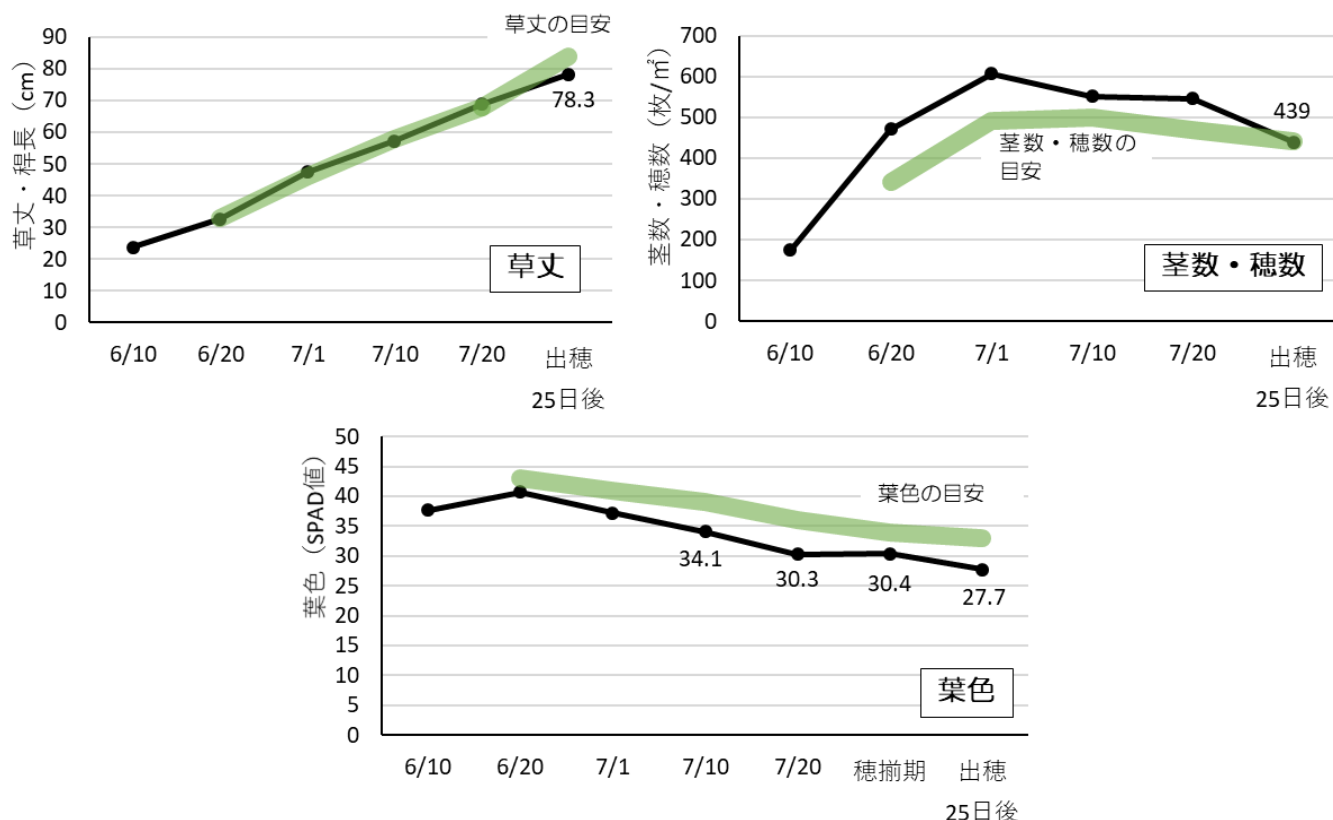


図2 生育調査ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- ・穂数は目安の 410～460 本/㎡の範囲でしたが、幼穂形成期（7 月 10 日頃）の葉色が目安を下回ったことから 1 穂粒数が 58 粒と少なくなりました。このため、㎡当たり粒数は 258 百粒とやや少なくなりましたが、登熟初期の天候に恵まれ登熟歩合が 86%、千粒重が 23.3g となり、精玄米重は 51.8kg/a となりました。
- ・出穂後 20 日間の日平均気温は 25.6℃と前年より低く、高温の影響は小さかったと考えられ、白未熟粒の発生は前年より少なくなりました。

表3 生育調査ほにおける収量調査結果

地点	年	穂数 (本/㎡)	1穂粒数 (粒)	㎡当たり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R6	446	58	258	86	23.3	51.8

※「登熟歩合」以降は、1.90mmの篩い目による調査結果

表4 生育調査ほにおける品質調査結果

地点	年	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	被害粒 (%)	玄米タンパク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R6	68.2	1.3	7.9	0.7	20.7	0.0	0.1	6.3

※穀粒判別器 RGQ100B（サタケ社）による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック（フォス・ジャパン社）による分析値

表5 出穂後20日間の平均気温

アメダス地点	年	出穂後20日間の 平均気温（℃）
気仙沼	R6	25.6
	R5	26.8

4 金のいぶき展示ほの生育調査結果

(1) 生育状況

- ・田植えは用水が不足したため、平年より 18 日遅い 6 月 1 日となりました。生育期間をとおして概ね高温で推移したことから田植の遅れが短縮し、出穂期は平年より 4 日遅く、成熟期は平年より 2 日遅くなりました。
- ・田植え直後の低温により活着が遅れ、茎数の増加は停滞しましたが、その後は高温により順調に増加し、穂数は平年を上回る 500 本/㎡となりました。
- ・葉色は、目安の葉色を維持できるように追肥を行い、概ね期待する葉色を維持しました。
※目安の葉色（SPAD 値） 幼穂形成期：33～35、減数分裂期：30～32
- ・収穫前に穂発芽が確認されました。

表6 展示ほにおける生育ステージ

地点	年	田植日	幼穂形成 始期	減数 分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R6	6/1	7/20	7/30	8/9	9/24
	前年差	11日遅	13日遅	7日遅	4日遅	6日遅
	平年差	18日遅	12日遅	7日遅	4日遅	2日遅

※「平年差」は、令和3年～5年の3か年平均値との差

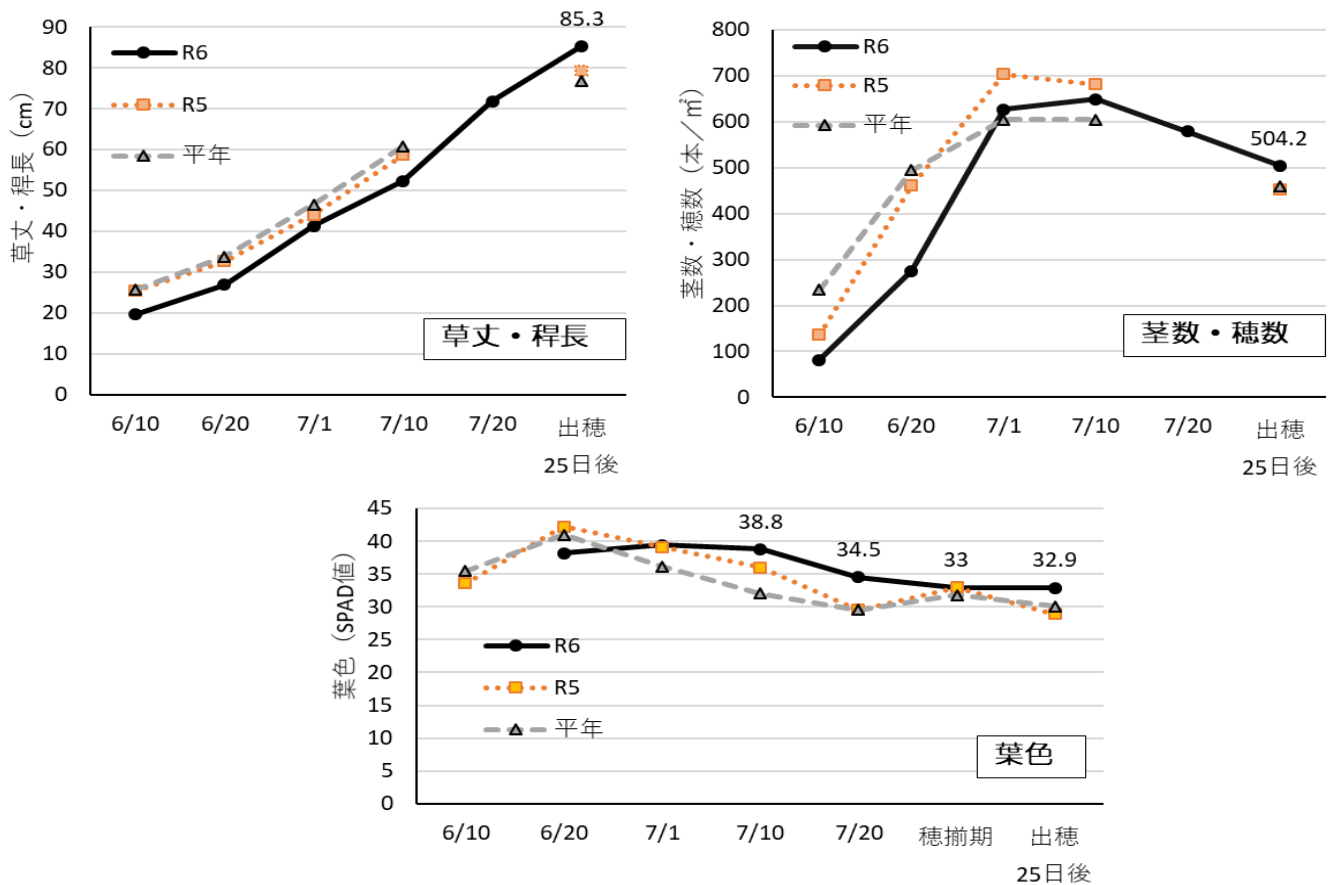


図3 展示ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- 穂数は 500 本/㎡、1 穂粒数は 68.2 粒となり、葉色を維持する栽培管理により㎡当たり粒数は 341 百粒と目安（目標）を確保しました。出穂期以降は気温が高かったものの日照不足となり、登熟歩合及び千粒重が目安を下回り、精玄米重は平年比 97%の 43.9kg/a となりました。（「目安（目標）」の数値については表7を参照）
- 前年は、高温による消耗や刈り遅れにより、みなし整粒は 2.6%とかなり低くなりましたが、本年は出穂期が 8 月 9 日となったこともあり、登熟期間の高温の影響が少なく、みなし整粒は 64.5%となりました。

表7 展示ほにおける収量調査結果

地点	年	穂数 (本/㎡)	1穂粒数 (粒)	㎡当たり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R6	500	68.2	341	59.7	21.5	43.9
	前年比	91%	112%	124%	94%	94%	109%
	平年比	109%	107%	116%	91%	93%	97%
(参考)	目安(目標)	460~510	60~68	300~330	70~75	22.4~23.0	51~54

※「平年比」は、令和3年～5年の3か年平均値との比

表8 展示ほにおける品質調査結果

地点	年	みなし 整粒 (%)	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	死米 (%)	被害粒 (%)	玄米タン パク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R6	64.5	1.3	0.1	62.8	0.2	0.4	2.8	32.0	0.3	7.1
	R5	2.6	1.6	0.0	1.0	0.0	0.0	3.9	93.2	0.3	8.2
	平年	54.0	1.8	0.2	51.9	1.1	0.3	2.4	42.3	0.4	7.4

※穀粒判別器 RGQ100B（サタケ社）による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック（フォス・ジャパン社）による分析値

※「平年」は、令和3～5年の3か年平均値

※「みなし整粒」は、「整粒」、「白未熟粒」、「その他未熟粒」の合計

5 水稲直播栽培展示ほの生育調査結果

(1) 生育状況

出芽・苗立ちは概ね良好で、出芽揃いは5月10日、苗立率は57.2%でした。生育期間は概ね天候に恵まれ、出穂期は8月8日、成熟期は9月20日となりました。

表9 展示ほにおける生育ステージ

地点	年	品種	播種日	出芽揃日	幼穂形成始期	減数分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R6	ひとめぼれ	3/25	5/10	7/13	7/23	8/8	9/20
	R5	ササニシキ	3/15	5/8	7/12	7/28	8/12	9/20

※乾田直播栽培の調査は、令和5年度から開始したため平年値はありません。

※令和5年度は「ササニシキ」、令和6年度は「ひとめぼれ」で実施。

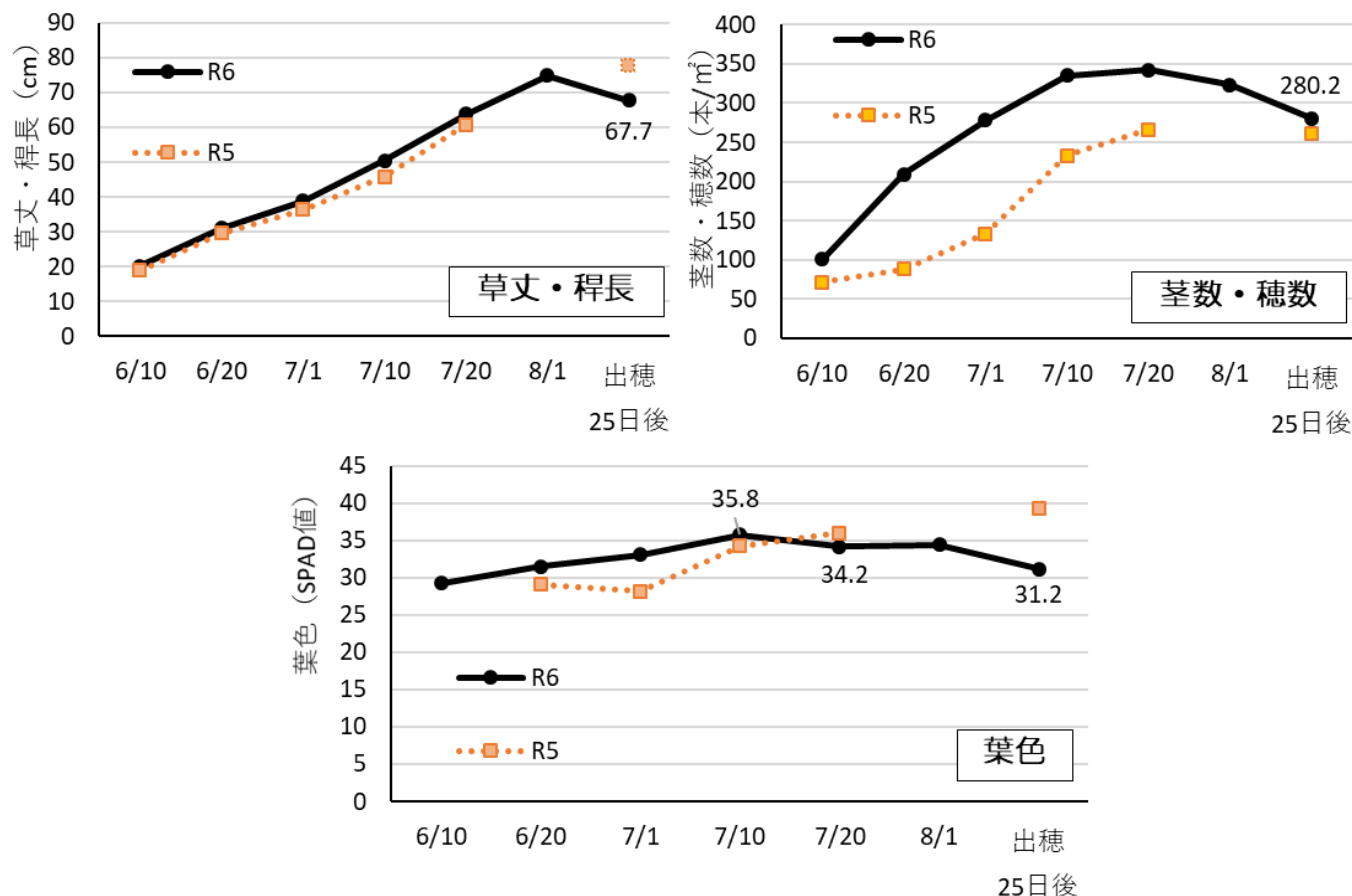


図4 展示ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- ・ほ場の鎮圧不足と推測される漏水が発生したため、茎数は少なく推移し、穂数は生育量の目安を下回る280本/㎡となりました。1穂粒数が66.8粒、㎡当たりの粒数は187百粒となり目安を大きく下回りました。また、葉色が淡く経過したことや登熟期間の日照時間が少なかったことから登熟歩合は79.1%となり、精玄米重は33.3kg/aとなりました。
(「目安(目標)」の数値については表10を参照)
- ・登熟期間は、前年より高温の影響が少なかったと考えられ、白未熟粒の発生は2.5%でした。

表10 展示ほにおける収量調査結果

地点	年	品種	穂数 (本/㎡)	1穂粒数 (粒)	㎡あたり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R6	ひとめぼれ	280	66.8	187	79.1	22.5	33.3
	R5	ササニシキ	261	105.4	275	64.3	21.7	38.5
(参考) ひとめぼれの目安(目標)			410~460	60~70	280~300	85~90	22.3	55.0

表11 展示ほにおける品質調査結果

地点	年	品種	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	死米 (%)	被害粒 (%)	玄米タンパ ク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R6	ひとめぼれ	75.4	0.1	2.5	0.0	21.1	0.2	0.0	0.6	7.0
	R5	ササニシキ	45.0	5.5	21.3	1.1	25.6	0.0	0.5	0.9	6.4

※穀粒判別器 RGQ1100B（サタケ社）による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック（フォス・ジャパン社）による分析値

6 高温対策技術展示ほ

高温対策に有効な技術として、①高温登熟下における白未熟粒の発生軽減に効果があるフジワン 1 キロ粒剤の散布と、②登熟初期の飽水管理の 2 つの技術を組み合わせて、管内に展示ほを設置しました。

今年産においては登熟期間の気温が前年より低かったこともあり、登熟への影響が判然としない結果となりました。

普及センターでは引き続き、高温対策に向けた技術の普及に取り組んでいきます。

7 作況と品質

（1）作況（東北農政政局、令和 6 年 12 月 10 日公表）

当管内を含む県東部の水稻の 10a 当たり収量は 590kg で、平年より 40kg、前年より 26kg 増加しました。また、農家等が使用しているふるい目幅ベース（1.9 mm）の作況指数は 107 の「良」となりました。

表12 令和6産水稻の収穫量と作況指数（東北農政局、令和6年12月10日公表）

区分	10a当たり収量 (kg/10a) ※1.7mmのふるい目			作況指数 ※1.9mmのふるい目
	R6	平年差	前年差	R6
県全体	583	+36	+17	107（良）
東 部	590	+40	+26	107（良）

（2）1等米比率（東北農政政局、令和 6 年 11 月 29 日公表）

令和 6 年 10 月 31 日現在の本県の水稲うるち玄米の 1 等米比率は 89.8%となっています。2 等以下に格付けされた主な理由は、形質（総検査数量に対する割合は 6.76%）、着色粒（同 2.93%）、被害粒（同 0.38%）によるものです。

表13 宮城県のうるち玄米における1等米比率（10月31日現在速報値）

1等米比率(%)	R6年産	R5年産	R4年産	R3年産	R2年産
各年同期	89.8	82.9	96.2	93.9	90.5
各年最終		83.9	94.2	92.5	90.9

※R5年産の最終はR6年3月31日現在

8 県内における病害虫の発生概要（宮城県病害虫防除所）

病害虫	発生量	発生要因
葉いもち	平年並	梅雨入りが平年より 11 日遅く、梅雨入り後も高温少雨傾向であったが、7 月に入ると曇りや雨の日が多く感染に好適だった。8 月に入ると晴れて気温がかなり高くなったことから、病勢の進展は緩慢だった。

穂いもち	やや少ない	出穂期前後は曇りや雨の日もあったが、梅雨明け後は晴れる日が多く、感染が抑えられた。一部のほ場では穂への感染が見られたが、気温の高い日が続いたことから、その後の病勢の進展は緩慢だった。
斑点米カメムシ類	やや多い (牧草地及び雑草地) やや多い (水田) 斑点米発生量 平年並	6月から8月にかけて気温が平年より高く推移したことから、アカスジカスミカメの越冬世代、第1世代成虫の発生盛期が平年より早まり、草地での発生量が平年を上回った。 水稻の出穂期も早まりカメムシ類の本田侵入が早まり、発生量も平年を上回った。その後も高温傾向が続き、アカスジカスミカメ第2世代の発生時期が早まり、発生量も平年を上回った。 防除は概ね適期に実施されたが、一部で薬剤の散布時期が遅かったり防除回数が1回と、本年のカメムシ類の発生状況に防除が適していなかった事例があり、また、イヌホタルイ等残草したほ場が平年より多かったことも斑点米の発生を助長した。

9 令和7年産の作付けに向けて

品質向上と安定生産に向けて適切な栽培管理に努めましょう。

(1) 高温条件に対応した米づくり

地球温暖化に伴い高温傾向が続くことが見込まれます。高温時期の7月下旬から8月上旬での登熟を回避するため、可能な範囲で出穂期を遅らせる**晩期栽培**や**直播栽培**に取り組みましょう。また、出穂期以降の葉色を維持し登熟や充実度を高め、白未熟粒の発生を軽減させるため、**葉色診断に応じた追肥**を実施しましょう。

(2) 適正な基肥と追肥の実施

「ひとめぼれ」の適正籾数は、収量・品質の安定性から㎡当たり28千粒～30千粒です。適正籾数に対して過不足があるほ場では、下記の増加割合を参考に窒素量を検討しましょう。

- ・基肥 窒素 1kg/10a で籾数が約 1,500 粒/㎡増加
- ・幼穂形成期の追肥 窒素 1kg/10a で 1,500～2,000 粒/㎡増加

【参考】ひとめぼれの適正籾数及び品質を維持するための生育目標値

	分けつ最盛期頃	最高分けつ期前後	幼穂形成期頃	減数分裂期頃	穂揃期	出穂後25日
草丈・稈長 (cm)	32～34	45～48	56～59	66～69	—	82～85 (稈長)
茎数・穂数 (本/㎡)	310～ 360	460～ 520	470～ 530	450～ 500	—	410～460 (穂数)
葉色 (GM 値)	41～44	40～42	38～40	35～37	33～35	33 以下

(3) 土づくり

近年は堆肥等の有機物施用が行われず、地力が低下しているほ場が多くなっています。地力の低下は、収量の減少、品質・食味の低下につながります。**深耕と有機物(完熟たい肥)の連用、土づくり資材(ケイ酸)の施用**により地力の向上を図り、品質の向上につなげましょう。

(4) 病虫害防除の徹底

- いもち病

葉いもちの発生は、直接減収につながる穂いもちの伝染源となります。箱施用や水面施用剤による**予防防除を必ず実施**し、発生が認められた場合には直ちに補完防除を行いましょう。

- 紋枯病

病斑上に形成された菌核が翌年の伝染源となる病害です。発病が多かった場合は、箱施用剤や出穂前（7月下旬）の防除を検討しましょう。

- 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）

水田畦畔の草刈りは出穂 15～10 日前に行うとともに、**薬剤防除は水稻の穂揃期とその7～10日後の2回を基本**としましょう。また、水田内のノビエ等の雑草はアカスジカスミカメを水田内に誘引するので、雑草防除に努め増殖を防ぎましょう。

(5) 雑草対策

残草（特にヒエ類）のあるほ場が散見されました。**発生草種に適した除草剤を選定**するとともに、**雑草の葉齢を確認**して葉期晩限を越える前に散布しましょう。また、水管理にも十分配慮し、安定した除草効果が得られるようにしましょう。

(6) 水管理

出穂後は水が必要な時期です。生育後半まで稲体の活力を維持するため、**間断かんがい**または土壌を湿った状態に保つ**飽水管理**^{ほうすいかんり}で管理し、**出穂後 30 日以降に落水**しましょう。